

金子みすゞ 「私と小鳥と鈴と」 受容研究

伊 藤 麻 由

はじめに

金子みすゞは、大正時代に生きた童謡詩人である。本論は、みすゞの詩の中から、先述した「私と小鳥と鈴と」を取り上げ、みすゞの詩が受け入れられていったその受容過程と、どのように人々に受け入れられてきたのかという、それぞれの詩の解釈を探るものである。以下に、「私と小鳥と鈴と」を引用する。

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、／お空はちつとも飛べないが、／飛べる小鳥は私のやうに、／地面を速くは走れない。／／私がかからだをゆすつても、／きれいな音は出ないけど、／あの鳴る鈴は私のやうに／たくさんな唄は知らないよ。／／鈴と、小鳥と、それから私、／みんなちがつて、みんないい。

一 金子みすゞと同時代

金子みすゞ、本名テルは、明治三十六年（一九〇三）四月十一日、山口県大津郡仙崎（現在の長門市仙崎）にて、父金子庄之助、母ミチ

の長女として生まれた。二歳上に兄堅助がおり、みすゞが生まれてから二年後の明治三十八年（一九〇五）に弟正祐が生まれる。

女学校卒業の後、書店で働きながら「みすゞ」のペンネームで童謡詩作・雑誌投稿を始める。投稿した童謡は、『童謡』九月号に「お魚」「打出の小槌」、『婦人倶楽部』九月号に「芝居小屋」、『婦人画報』九月号に「おとむらひ」、『金の星』九月号に「八百屋のお鳩」がそれぞれ掲載された。『金の星』を除く三誌は西條八十の選であり、特に『童謡』誌上では「推薦」として大きく取り上げられた。大正十五年（一九二〇）に結婚をするが、夫に詩作を禁じられ、ついに昭和五年（一九三〇）二月に離婚をする。娘ふさえを引き取りたいとする夫に抵抗するため、同年三月十日に睡眠薬を飲み自殺した。

享年二十六歳で亡くなったみすゞだが、その短い生涯で多くの童謡詩を残している。その背景には日本で起こった童謡運動があるといえる。小島氏によると、日本にヨーロッパ音楽が輸入されてからの動きは大きく三つに分けることができる。明治三十三年（一九〇〇）からの第一期、大正七年（一九一八）からの第二期、昭和三年（一九二八）からの第三期である。第一期に、ようやく芸術作品らしい作品が現れるが、その作品はヨーロッパ音楽の古典派やロマン派の作品のスタイルを追い求めたようなものだった。しかし第二期から日

本人らしい伝統を生かした表現を求める動きが表面化し、第三期には近代主義的な表現が強くなる。こうした動きの中で、第二期と重なる始まり、終わったのが童謡運動であった。この第二期の期間、みずぶが創作を始めてから亡くなるまでの期間とほぼ重なり、みずぶは童謡勃興時代に生きた詩人だと言える。

童謡運動の前触れとして登場したのは、明治四十五年(一九一三)の吉丸一昌による「新作唱歌」、大正四年(一九一五)の小松耕輔・梁田貞・葛原函による「大正幼年唱歌」である。当時の文部省唱歌に対しては多くの批判があつたが、それらのやたらに教訓的で固苦しい作詞の方針に対し、新しく登場したこれらの唱歌集に収録された詩の代わりたいは親しみやすい口語体で書かれ、ユーモラスな味もあつた。

こうした動きが、童謡運動を展開させる基盤となり、大正七年(一九一八)七月には、童謡童謡雑誌『赤い鳥』が創刊される。「童謡と童謡を創作する最初の文学的運動」として、『赤い鳥』主宰者の鈴木三重吉は「世間の小さな人たちのために、芸術として真価ある純麗な童謡と童謡を創作する最初の運動を起したいと思ひまして、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰発行することに致しました」と語っている。大正八年(一九一九)五月号から、詩に作曲され楽譜つきの形で童謡作品が発表されるようになり、その最初の作品は、西條八十作詞、成田為三作曲の「かなりや」であつた。この大成功が、三重吉の中で、歌う歌としての童謡のイメージを、急速に具体的な形をもつてとりはじめたといえる。

同年十一月には『金の船』が創刊され、これは創刊号から楽譜つきの童謡が掲載されていた。この二誌を中心に、童謡普及運動は

進んでいくことになる。

二 二 みずぶの再発見

昭和四十一年(一九六六)、当時大学一年生だつた児童文学者の矢崎節夫氏は、与田準一編『日本童謡集』(岩波書店、一九七九)に掲載された金子みずぶの「大漁」に衝撃を受け、これをきっかけに矢崎氏の「みずぶ探しの旅」が始まつた。

長い年月を経て、昭和五十七年(一九八二)、彼はついにみずぶの実弟、上^{うへ}山雅輔氏(本名・上山^{うへ}正祐)と連絡をとることに成功する。六月二十日に上山氏を訪ね、矢崎氏のもとに、みずぶの写真と、三冊の手書きの遺稿集^{しゆ}が託された。

この三冊の遺稿集には五二〇編もの詩が収められており、矢崎氏はみずぶの全集発刊を決意した。昭和五十八年(一九八三)十二月十四日の朝日新聞では『金子みずぶ全集』の発行が報じられ、みずぶのことが中央紙に取り上げられた最初の出来事となつた。大変反響が大きく、当初三百組の予約を目標にしていたのにも関わらず、七百組の予約を越え、結局千組が限定版『金子みずぶ全集』として、昭和五十九年(一九八四)二月二十八日に出版された。それでも足りなくなり、同年八月に、新装版という現在の形で発行することになつた。

『金子みずぶ全集』は、三冊の遺稿集それぞれを「美しい町」、「空のかあさま」、「さみしい王女」というタイトルを冠した三巻と、矢崎氏による『金子みずぶノート』から成つており、「私と小鳥と鈴と」は三巻の「さみしい王女」に収録されている。

「手帳の目次には、タイトルの上に○印がつけられ、『註 ○印は活字になりしもの』というメモ書きがあった」と『金子みすゞノート』には記してあり、「さみしい女王」には八編の○印があり、その中で発表作品を入手できたものは三編あった。また、目次に○印はなかったものの発表作品がみつかったものが一編あり、全集が出るまでに発表された作品は、「雀」「世界中の王様」「さみしい女王」「墓たち」「汽車の窓から」「女王さま」「不思議」「雪」「丘の上で」の九編であった。

このことから、この全集が「私と小鳥と鈴と」の初出であり、全集出版を機にこの詩が人々の目に触れた^五と言えるだろう。

全集出版の他に、みすゞの詩が再注目されるきっかけとなったのが、教科書への収録だった。みすゞの詩は平成七年(一九九五)、教科書検定に合格し、平成八年度教科書に掲載されることが決定した。川崎氏は「一九九五年(平成七年)までのブームが各社による教材選択に大きな影響を与えたものと思われる」と述べ、掲載教科書の表を記している。以下の表は引用である。

『小学国語三上わかば』	光村図書出版
『小学国語四上』	東京書籍
『小学国語五下』	学校図書出版
『小学国語五下』	教育出版
『小学道徳 生きる力 6』	大阪書籍

平成8年に掲載された教科書と副読本(上)と、内容の一覧(下)

教科	出版社	学年	内 容
国語	光村図書	3上	詩「わたしと小鳥とすずと」
	東京書籍	4上	詩「ふしぎ」
	学校図書	5上	詩「わたしと小鳥とすずと」
	教育出版	5下	ノンフィクション「みすゞ探しの旅—みんなちがってみんないい—」(矢野龍夫の中に「わたしと小鳥とすずと」)「大造」のゆの3詩
道徳	大阪書籍	6	詩「わたしと小鳥とすずと」

なお、学校図書出版による教科書が、上の表では「五下」、下の表では「五上」となっているのは原文ママである。後述するが、現在学校図書出版からは「四年上」として出版されているため、先行研究発表当時、どちらで出版されたのかの真偽は不明である。川崎氏はこの表に続けて「五社の内、四社が『わたしと小鳥とすずと』を掲載している。同じ詩人の作品を教科書が一斉に選択したのは、各教科書会社がブームに乗り遅れまいとして掲載を急いだ結果と見える」と述べている。

筆者の調査によると、平成十一年(一九九九)と平成十三年(二〇〇一)には、大阪書籍の『小学国語三年上』にも掲載していたことが分かった。しかし大阪書籍は平成二十年(二〇〇八)、少子化の影響などで教科書の売り上げが伸び悩み、当時の大阪書籍社長による不動産事業への進出も失敗したため、多額の借金を負い、民事再生法の適用を申請した^六。教科書の著作権譲渡を受けた日本文教出版は、現在国語の教科書を発行していない(「書写」という形で発行ため、現物を調査することができない^九)。

筆者が現物を調査できた教科書は、『国語三上わかば』(光村図書出版、二〇一一・二二)、『みんなと学ぼう 小学校国語四年上』(学校図書、二〇一一・二二)、『ひろがる言葉 小学国語五下』(教育出版、二〇一一・六)の三つである。大阪書籍による道徳の教科書は現在発行しておらず^七、また、東京書籍の国語教科書は、「わたしと小鳥とすずと」を掲載していないので調査しなかった。ちなみに、川崎氏が論文で述べていた二〇〇二年時点では、学校図書から出版された教科書の対象学年が五年生だったことに対して、現在入手した教科書では四年生が対象学年になっている。

三 「私と小鳥と鈴と」の解釈

二章にて、『金子みすゞ全集』が「私と小鳥と鈴と」の初出であったと述べたが、この全集出版に尽力し、「私と小鳥と鈴と」を再発見したともいえる、矢崎氏によるこの詩の解釈はどのようなものだっただろうか。矢崎氏は、詩中の「鈴と、小鳥と、それから私」に注目し、以下のように述べている。

「みんなちがって、みんないい」とは、一人ひとりの個性やちがいを大切にするとか、誰もがかけがえのない大切な存在ということと考えるのですが、実は『私と小鳥と鈴と』という詩のいちばん大事なところは、一行前の、「鈴と、小鳥と、それから私」なのです。題は『私と小鳥と鈴と』ですが、私の位置がひっくり返って、「鈴と、小鳥と、それから私」と「あなたと私」になったとき、初めて、「みんなちがって、みんないい。」という、嬉しい言葉が成りたつのです。

「私とあなた」では、「みんなちがって、みんないい。」は成りたちません。「みんなちがって、みんないい。」の中には「人をいじめたり、傷つける人は入りません。」「みんなちがって、みんないい。」とは、誰をも「丸ごと認めて傷つけない」ということが前提だからです。もちろん、今までは人をいじめたり、傷つけたりした人でも、「もう決してしない」と決めたら、誰でも入れる世界が、「みんなちがって、みんないい。」です。

「私とあなた」というまなざしだと、「私はわたしでいいのだ」というメッセージが先にきてしまい、「私は何をやってもいい」という自分中心のまなざしになってしまう。題名がひっくり返って「あなたと私」になったからこそ、「あなたはあなたでいいのだ」というメッセージになり、これが最初のまなざしなのだ、というものが矢崎氏の考えである。

更に矢崎氏は「みんなちがって、みんないい」を「丸ごと認めて傷つけない」「そして、それは愛するということ」だと述べている。今一番助けが必要な人に手を差し伸べるというまなざしが無ければ、すべての人を平等に幸福にすることはできないと解釈する矢崎氏は、この詩の中で語られているのは「私」「小鳥」「鈴」の三者だけではなく、「すべての人」「すべてのもの」であると考えているのだと推測できる。

この矢崎氏の解釈は、「あとは大人である私たちが、きちんと『みんなちがって、みんないい』を知ることだ」と彼が述べているように、大人に向けて発信している解釈である。しかし矢崎氏は、低年齢向けの書籍も発行しており、その中でも「私と小鳥と鈴と」について触れている。

彼の著書『みんなを好きに 金子みすゞ物語』(JUIA出版局、二〇〇九・四)の奥付のページには「古い資料は、旧仮名づかい・旧漢字を、現代仮名づかい・新漢字に改めています」、原則として、小学五年生以上に配当されている漢字の初出には、ルビを付しています」とあり、著者あとがきである『みんなを好きに』によせて「では、『うれしいことに、小学生のみなさんは、小学校を卒業するまでに、一度は金子みすゞさんの作品と名前に出会います』とあり、こ

の本は小学生などの低年齢層を対象に書かれている事が分かる。

同書の「第三章・大津高等女学校時代」の中において、第一次世界大戦の影響で米騒動が起こった件について、学校内で話題になったという場面がある。「だれもが、みんなちがうからすばらしいのに、戦争は、ちがうことを認めないこと。テルは『赤い鳥』のもつ、子どもたちの未来への願いと、米騒動や戦争という大きなかなしみの中で、いのちのこと、ちがうことのたいせつさを知っかりと考えていたのです」と書かれた後に、「私と小鳥と鈴と」が引用されている。「私と小鳥と鈴と」はみずぶの結婚後に書かれた詩であり、女学校時代に書かれたものではないので、ここで引用されるのは不自然である。それでもここでこの詩が引用されたのは、「みんなちがって、みんないい。」という一文から、前述のようなメッセージを読者に受取ってほしかったからだと考えられる。そしてこの場合、矢崎氏は低年齢層も含んだ読者を想定しているのだ。

ここで注目すべきなのは、「あなたはあなたでいいのだ」という矢崎氏の解釈が、「みんなちがうからすばらしい」「ちがうことのたいせつさ」と分りやすく言葉を変え、読者である子どもも違一人ひとりも違っていいのだというメッセージを付与させた点と、「いのちのこと」という新しい視点を提示した点である。前述した「私と小鳥と鈴と」の詩引用の前に、与謝野晶子による「君死にたもうことなかれ」にも引用されているため、より「いのち」についてのメッセージを強く込めたものであると見受けられる。

このような「存在」や「いのち」への注目を解釈の基盤に据えつつ、より「相手」への注目を増し、主に教育現場を中心に受容されていったのが、「個性尊重」の解釈である。前述した通り「私と小鳥

と鈴と」は小学校の教科書に掲載されているため、この解釈も低年齢層へ向けた解釈であり、児童期に多く受容されていると言えるだろう。

教育出版社の教科書には、矢崎氏による『みずぶ探しの旅』という全集出版までの自伝の中に、金子みずぶの詩を紹介する形で、「私と小鳥と鈴と」が掲載されている。「みずぶはこの世に存在するすべてのものが、それぞれちがうからこそすばらしく、一人一人がちがうからこそ大切で、すてきなのだ」ということを、こんなふううたって書いています」という文の後に詩を引用し、続けて「金子みずぶの作品は、小さなもの、力の弱いもの、そこにあるのに気がつかれないもの、本当は大切なものなのにわすれてしまわれがちなもの——この地球という星に存在するすべてのものに対し、深いやさしいまなざしを投げかけたものばかりです」と述べている。ここでも前節で述べたような、矢崎氏の低年齢層へ向けた解釈である。「ちがいのすばらしさ・大切さ」が解説されている。学習のてびきには「筆者は、金子みずぶの作品のどのようなところに心ひかれたのでしょうか。文章中に取り上げられている作品をもとに、話し合いましょう」と書かれており、矢崎氏のこのような解釈が、学習の中で児童に伝わっていると見える。

光村図書出版の教科書には、本文には「声に出して読もう。じんとするよううなうれしい一行が、詩の中にきらりと光っているね」と、指導書主題には「世の中一つ一つのものが皆それぞれ違っていて、それぞれの良さをもっている。(作者の発見と喜び)」と書かれていると、川崎氏^三は述べている。川崎氏による論文が書かれた当時は、同じく「個性尊重」の考えを育成の目標として掲げられていたと言

えるだろう。しかし、筆者が入手した平成二十三年(二〇一一)に発行された教科書の本文には、「詩の中のまとまりを、『連』といいます。『わたしと小鳥とすずと』は三連の詩です。第一連と第二連は、よくにています」としか書かれておらず、この後に、岸田杵子の「みいつけた」という詩が掲載されている。以下は、『国語三上わかば』(光村図書出版、二〇一一・二)による引用である。

みいつけた

ちいさなみ つめたくて／ちいさなたね こぼれてて／ちいさいくも うかんでて／ちいさいむし はっている／／えんぴつのしん ひかたって／すなのつぶ ちらばってて／いとくすすこし おちていて／あとは なんだかしらない ごみ／／きようは ちいさいものばかり／みいつけた

教科書には、この詩の引用の後に『みいつけた』と『わたしと小鳥とすずと』で、組み立てやないように、にているところはあります。ちがうところはありますか？二つの詩で、心にのこる言葉や、『いいな』と思ったところを話しましょう」とある。以前のよう「個性尊重」の解釈を前面に押し出すのではなく、読み手である児童自身がより自由に解釈できるような教育内容になっていると言えるだろう。また、光村図書出版ホームページ^四では指導用資料を公開しており、主な指導事項は「二つの詩を比べながら読み、詩の組み立てや内容がよく分かるように言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して音読することができる」、言語活動は「詩を音読することとしており、音読に力を入れていることが分かる。音読させること

によって、より児童たちによる詩の内容理解に繋がりが、みずどの詩が記憶に残る要因になっているのだろう。

この十年近くで光村図書出版の教育方法の変化が見られたが、より大きな変化を見せたのが、学校図書出版の教科書である。川崎氏^五によると、学校図書出版の指導書には「すぐれた個性や幸せをだれもが持ち合わせているものだ。自分と他と比べるととき短所や不十分なものも、目につきやすい。だからわが身の不幸をかこちやすい。本当は何者にもかえがたい特色、すぐれたものを持ち合わせているのだ」と書かれている。筆者が入手した平成二十三年(二〇一一)に発行された教科書には、「読書を楽しもう」という単元の「詩を読もう」の中で、まど・みちお「ぼくが、ここに」の後に掲載されている。以下は『みんなと学ぶ 小学校国語四年上』(学校図書、二〇一一・二)による引用である。

ぼくが ここに

ぼくが ここに いるとき／ほかの どんなものも／ぼくに
かきあって／ここに いることは できない／／もしも ソウ
が ここに いるならば／そのソウだけ／マメが いるならば
／その一つぶの マメだけ／しか ここに いることは でき
ない／／ああ このちきゅうの うえでは／／こんなに だいに
に／／まもられているのだ／／どんなものが どんなところに／
いるときにも／／その「いること」こそが／／なにも まして／
すばらしいこと として

「ぼくが「ここに」とともに掲載されていることから、「一人ひとりの存在そのもの」や「すぐれた個性」を受け入れる考え方を指導していることが見てとれるだろう。しかし、学校図書出版ホームページによると、平成二十七年教科書から掲載詩が変化し、「わたしと小鳥とすずと」や「ぼくが「ここに」の代わりに、原田直友「はじめて小鳥が飛んだとき」、金子みすゞ「ふしぎ」が掲載されている。

不思議

私は不思議でたまらない、／黒い雲からふる雨が、／銀にひかつてゐることが。／私は不思議でたまらない、／青い桑の葉たべてゐる、／蚕が白くなることが。／私は不思議でたまらない、／たれもいぢらぬ夕顔が、／ひとりではらりと開くのが。／私は不思議でたまらない、／誰にきいても笑つて、／あたりまへだ、といふことが。

「ふしぎ」では「わたしと小鳥とすずと」のような「個性尊重」の解釈をすることは難しい。同ホームページの指導計画の中では、評価基準として「短詩形による独特な表現に気付いている」という文があることから、詩の解釈よりも「構成」についての教育が成されていることが予想される。これは、詩の解釈への手助けになるような一言から、詩の連についての解釈へと本文が変化した、光村図書出版の教科書においても同じことが言えるだろう。

このような動きの中、先述した「私」「小鳥」「鈴」がそれぞれ「みんなちがつて、みんないい」という「個性尊重」の解釈に反論し、

「小鳥」も「鈴」も「私」に近しい存在であり、「私」自身の肯定としてこの詩が書かれていると考えたのが小倉氏^七である。小倉氏は「私と小鳥と鈴と」の中で主に論じられているのは「みんなちがつて、みんないい」の箇所だけであるということを述べたうえで、前半の二連について考察している。第一連に登場する「小鳥」について、「光の籠」、「さみしい王女」の二つの詩を例に出した上で、『私が両手をひろげても、／お空はちつとも飛べない』における飛べない『私』は、ぱつと翅さえ広げたら飛べるはずだけれども飛べない『私』（『光の籠』）や、昔は飛べたのに飛べなくなった『王女』（『さみしい王女』）という流れの上に歌われていることが分かり、「どちらも、『私』と『小鳥』とがかけ離れた存在でないことを保証している」と述べている。

光の籠

私はいまね、小鳥なの。／／夏の木のかけ、光の籠に、／みえない誰かに飼はれて、／知つてゐるだけ唄うたふ、／わたしはかはいい小鳥なの。／／光の籠はやぶれるの、／ぱつと翅さへひろげたら。／／だけど私は、おとなしく、／籠に飼はれて唄つてる、心やさしい小鳥なの。

さみしい王女

つよい王子にすくはれて、／城へかへつた、おひめさま。／／城はむかしの城だけど、／薔薇もかはらず咲くけれど、／／なぜかさみしいおひめさま、／けふもお空を眺めた。／／（魔法つかひはこはいけど、／あのはてしないあを空を、／白くか

がやく翅のべて、／はるかに遠く旅してた、／小鳥のころがなつかしい。／街の上には花が飛び、／城に宴はまだつづく。／それもさみしいおひめさま、／ひとり日暮の花園で、／真紅な薔薇は見も向かず、／お空ばかりを眺めてた。

また「光の籠」に注目し、「知つてゐるだけ唄うたふ／私はいかに小鳥なの」から、「小鳥＝私」は美しい声で歌えたことに對し、「私と小鳥と鈴と」の第二連における「鈴」は、「私」がからだをゆすつても／きれいな音は出ないけど」と詠まれていることについて、「飛べたのに飛べなくなつた『私』と同じように、ここでは、きれいな声で唄えたのに音の出なくなつた『私』という構図が読み取れるだろう」と述べている。更に、「みずゞ」という作者の名前に「美鈴」という美しい鈴の音のイメージが付与していたのではないかと推測したうえで、「小鳥」も「鈴」も「私」と非常に関わりの深い存在であるとし、「この詩は明らかに『私』のための詩なのである。そして、『小鳥』のように飛べず、『鈴』のように鳴らない『私』でも、生きる価値を見出そうとしたのが、最後の『みんなちがって、みんないい』という言葉だったわけだ」と論じている。

また、川崎氏も「矢崎のいうように『この世に存在するものすべてのもの』など金子みすゞはうたっていない。ことりと鈴と私の三者がすべてである。それも詳細に読めば、『わたし』のこしか述べていないということはずぐわかる」と述べており、前述した「この詩の中で語られているのは『私』『小鳥』『鈴』の三者だけではなく、『すべての人』『すべてのもの』である」という矢崎氏の解釈に反論している。続けて、この一見無関係な三者をまとめて「みんな」

と呼んだのは「唄をうたう」という共通点があるからであり、「それぞれのやり方で唄を歌うが、私は私で、詩人の道を歩きたい、これでいいんだという詩人としての自己肯定。その上にたつた充足感の表現」と解釈している。「みんな」とは「わたし」自身のことであると解釈する川崎氏は、教育現場では「一人一人が違うことの良さ」、「人はみんなそれぞれに良さがある」ということを主張する詩として解釈されていることに反論し、『多様な文化の優れた個性を深く理解する能力』を強調しようとするあまり、この主題を歪曲したのではないだろうか」と述べている。

四 合唱曲化による流布

「私と小鳥と鈴と」の流布媒体の一つに、合唱があげられる。

以下は、「私と小鳥と鈴と」の詩に付曲された合唱組曲の出版年、作曲家や組曲名などの曲集情報、曲の編成、その曲集内での「私と小鳥と鈴と」の表記のされ方を表にしたものである。作曲家による作曲年が分かるものもあるが、世の中への流布という点からまず考察するため、表には記載していない。

この表から、合唱曲化したのは一九九五年以降の非常に新しい社会現象であることが分かる。一九九〇年代には女声合唱として作曲されていたが、二〇〇〇年代からは混声としても作曲されていることから、流通の拡大が見受けられる。また、同じく一九九五年から「私と小鳥と鈴と」が教科書に掲載され始めたということを前提に考えると、それらを見て勉強した子どもたちが中学生になり、合唱に触れる機会が多くなつた頃に、混声合唱の譜が出版されているこ

とになる。これは、混声合唱譜のニーズが高まったとも考えられるであろう。

年	曲集	編成	曲名表記
1995	大竹みく◇オルガン伴奏による女声合唱作品『みえない星』初出(その後女声・混声に編曲)	女声:SSAdiv 混声:SATB	私と小鳥と鈴と
1997	松下耕◇女声合唱のための5つの童話『わたしと小鳥とすずと』出版(カワイ出版、11月) 宗像和心無伴奏女声合唱『私と小鳥と鈴と』出版(音楽之友社、12月)	SSA SSA	わたしと小鳥とすずと 私と小鳥と鈴と
2000	鈴木憲夫◇同声(女声)のための合唱ファンタジー『みすゞこのみち』出版(カワイ出版、5月)	SSA	私と小鳥と鈴と
2003	鈴木憲夫◇混声のための合唱ファンタジー『みすゞこのみち』出版(カワイ出版、4月)	SATBdiv	私と小鳥と鈴と
2004	横井久美子◇楽譜集・横井久美子ソング&エッセイ『歌って愛して』出版(音楽センター、1月) 横山裕美子◇2部合唱とピアノのための『みすゞとの旅』出版(音楽之友社、11月)	SA	私と小鳥と鈴と わたしと小鳥とすずと
2005	大竹みく◇金子みすゞの詩による7つの女声合唱曲『みえない星』(2110) The First Edition出版(カワイ出版、3月) 石若雅弥◇女声(同声)合唱とピアノのための『少女のまなざし』出版(マザーアース出版、12月)	SA	私と小鳥と鈴と わたしと小鳥とすずと
2009	新実徳英◇無伴奏混声合唱のための愛唱曲集『金子みすゞの八つのうた』出版(音楽之友社、6月) 信長貴富◇混声三部合唱とピアノのための『青いフォークロア』初演(12月)	SATBdiv	私と小鳥と鈴と
2010	信長貴富◇混声三部合唱とピアノのための『青いフォークロア』出版(カワイ出版、2月) BANANA ICE◇青山しおり編曲・混声3部合唱めざせ!合唱コンクール(ヒット・ソング編)出版(ドレミ楽譜出版社、11月)	SABdiv SAB	私と小鳥と鈴と 私と小鳥と鈴と
2011	吉岡しげ美◇金子みすゞ13曲のソロと女声合唱『わたしと小鳥とすずと』出版(ハナ、8月)	SA	わたしと小鳥とすずと
2012	杉元竜一◇青山しおり編曲・児童2部合唱『はじめてのハーモニー』出版(ドレミ楽譜出版社、6月) 【2009年7月に発売されたものは絶版か?】	SA	私と小鳥と鈴と
2014	相澤直入◇合唱エクササイズ『アンサンブル編2』出版(カワイ出版、3月)	SA	わたしと小鳥とすずと

※編成はS=ソプラノ、A=アルト、T=テノール、B=ベース、div=ディヴィジョン(division)

=パート内で音が分かれること、を略称として使っている。

さらに、「NHK「みんなのうた」にて、作曲・杉本竜一、編曲・美野春樹、歌・新垣勉の「私と小鳥と鈴と」が二〇〇六年十二月二〇〇七年一月に放映され、「NHK」にほん(こ)であそぼの月の歌にて、作曲・BANANA ICE、編曲・周防義和「私と小鳥と鈴と」が放映された。この放映時期は不明だが、二〇〇八年十月にアップロードされた映像が You Tube にあるため、それ以前であることは確かだろう。テレビメディアでの放映により、詩としてだけではなく、曲としての「私と小鳥と鈴と」が多く広まったと考えられる。

また表の中で、曲集内での「私と小鳥と鈴と」の表記のされ方の違いについて触れたが、全て単語が漢字で書かれた「私と小鳥と鈴と」と、ひらがなが混ざった「わたしと小鳥とすずと」の二種類があることが分かる。全て分類して見ると、ひらがなが混ざった表記で書かれた曲は、すべて女声曲であった。

そもそも、金子みすゞが手帳に記したそのままの表記で載っている全集では、「私と小鳥と鈴と」という漢字表記である。研究論文でも主にこの漢字表記での詩が引用され、記されている。しかし、教科書での表記は「わたしと小鳥とすずと」であり、引用されている詩も、所々漢字がひらがなに直され掲載されている。これは、まだ「私」や「鈴」などの漢字を習っていない学年時の教科書に掲載されているためだと考えられる。文部科学省による小学校学習指導要領⁹では、「小」は第一学年、「鳥」は第二学年で習う漢字とされているのに対し、「私」は第六学年、「鈴」は該当がなく、中学以降に習う常用漢字とされている。

この教科書で使われていたひらがな表記が、何故合唱に、しかも女声合唱に使用されていたのだろうか。理由の一つとしては、合唱

作品の対象に児童が含まれているということが考えられる。児童合唱とは変声前の子どもによる合唱のことであり、ジャンルとしては同声合唱に含まれ、これに女声合唱も分類される。また、児童合唱と女声合唱は音域がほぼ重なっているため、女声譜を児童たちが歌うことも可能だ。つまり、女声合唱として作曲された曲を児童も歌うことができるようにするため、表記をひらがなにしたらと考えられる。

これらから分かることは、合唱による流布は、初め女性・児童から広まって行き、続けて混声という形で男性にも受容されていったという形になっていることである。一章でも述べたように元々みずぶの詩は童謡詩であるという点、また合唱曲化したのが一九九五年という、教科書に詩が掲載された年と同年代という点からも、流布の出発点が児童にあることには納得がいくだろう。

全日本合唱連盟には『ハーモニー』という、年に四回(一月・四月・七月・十月の各月十日)発行している会報があり、日本唯一の合唱専門誌として評価されている。この『ハーモニー 第一六八号』(全日本合唱連盟、二〇一四・四)にて、作曲者・信長貴富、ピアノ・前田勝則、合唱指揮者・山脇卓也、合唱指揮者・清水敬一による対談形式で、信長氏の作品について語るコーナーページがあり、二〇一〇年に出版された信長貴富氏による『青いフォークロア』も話題にのぼっている。以下は引用である(傍線部は引用者によるものとす⁽⁹⁾)。

清水 (中略)『青いフォークロア』もおとなが歌う混声三部としてまたいいんですよ。

信長

混三でどう書けばいいのか悩みました。男声の人数が少ない混声合唱団でも、四声で歌った方が音の鳴り方はいいので、男声が少ないから混三という発想ではなく、音楽的に積極的な意味があるべきだと思っんです。悩んだりのものは書けたと思います。

清水氏が「おとなが歌う混声三部」と述べているのは、普通、混声三部合唱は変声期の中学生向けとして作曲されるからである。それに対して信長氏は、混声合唱として作曲する上で、普通は混声四部にするところをあえて混声三部にすることに積極的な姿勢をとったと述べている。このように、子どもはもちろんのこと、大人にも広く受容されることを考えて作曲されるようになったことが分かる。合唱にはその手軽さ故、幅広い年齢が楽しめるというメリットがあるため、ますます需要が増え、次第に児童から大人へと流布が進んだと考えられる。

そして、合唱の中で児童から大人へと流布が進むということは、そこに男女差が生まれるということである。前述した通り、児童合唱は「同声」合唱に含まれるが、成長し変声期を過ぎると、それは「混声」合唱に分類される。つまり混声譜の受容が高まったのは、男性からの需要が高まったということだろう。しかし、見落とせない点は、表中でも分かる通り、男声合唱としては作曲されていない点である。

矢崎節夫選『みずびさんへの手紙』(JULA出版局、一九九八・七)では、まえがきのなかで「みずびさん、あなたは亡くなって、なお、みんなの心のなかで生きていますね。そこで、『みずびさんへの

手紙」を募集することにしましたのです。日本中から千通あまりの手紙が、JUIA出版局に届きました」と記し、下は小学一年生、上は八十二歳までの七十通もの手紙を掲載している。その七十通の中の男女比は、男性が十八人であるのに対して女性が五十二人であり、圧倒的に女性が多い。このことから、みずぶの詩の読者は女性層が多い、または女性に対してより多く受け入れられている、ということが分かる。女声合唱から混声合唱へと需要が拡大してはいるが、あくまでも女性中心という印象はぬぐえないだろう。

五 作曲者の意図と、解釈の自由化

石若氏は『少女のまなざし』二〇作品解説の中で、「この作品は、岸和田市少年少女合唱団の委嘱により作曲しました。詩の選定から、指揮者の小原先生を始め団関係者の方々とともに相談しながら作りました。児童合唱用に作曲しましたが、それにこだわることなく、色々な方に演奏していただけることを望みます」と述べ、そのあと各曲の簡単な演奏指導を記している(しかし、「わたしと小鳥とすずと」についての演奏指導の記述はない)。新実氏は『金子みすぶの八つうた』三の中で、「委嘱して下さったコール・スガンデイの皆さんの御要望に従って金子みすぶさんの詩で混声合唱を作ることにになりました。(中略)私はできるだけ易しく、いつでもどこでも合唱団が口ずさめる曲にしたいと思ひ、このような無伴奏の曲集となつたのです。(中略)たぶん、ですが、中学・高校生から大人の皆さんまで、それぞれに楽しめる曲集になったと思ひます」と述べ、石若氏と同様、特定の年代だけではなく、幅広い年代向けに作曲されて

いることが分かる。

また、横山氏は『みずぶとの旅』三の後述として「演奏のために」を記しており、曲ごとに演奏指示を掲載している。その中の、「わたしと小鳥とすずと」についての記述を以下に引用する。

四十四小節目からは、合唱はメロディーをリレーしていきます。合唱団の一人ひとりの「わたし」が私たちもみんな違って、みんないいのだという気持ちを、キャッチボールでつないでいくイメージで書いてあります。(中略)詩人の「わたし」、作曲者の「わたし」、そして演奏者のみなさんの「わたし」、いろいろな「わたし」がこの曲を通して「みんないい」と感じ合えれば素晴らしいことだと思います。

更に、NHK「ほんごであそぼ」で放送された、BANANA ICE による作曲の「私と小鳥と鈴と」は、曲の最後に「みんなちがって、みんないい」の歌詞を何回も繰り返している。このように、「みんなちがって、みんないい」という歌詞をそれぞれの作曲者が意識して作曲しているであろうことが分かる。

先に引用したように横山氏は、「合唱団一人ひとりの『わたし』が私たちもみんな違って、みんないいのだという気持ち」と述べているが、これは極めて強い「個性尊重」ではないだろう。そもそも合唱とは各人がパートの中で揃い、各パートが全体として揃うという融合性の中で生まれるものである。もちろん、一人ひとりの違いにより各合唱団の特徴は生まれるだろう。つまり、ここでいう「みんな違って、みんないいのだ」は、個人の「優れた個性」の尊

重というよりは、「存在の認容」に近いものである。「個性尊重」の解釈が無くなってしまったとまではいかないが、ある程度、最初の「個性尊重」を併せ持つハイブリッドな解釈が新しく生まれたといえるだろう。

一方で横山氏は、以下のようにみずぶの詩に対する自分の解釈を述べている。

金子みずぶの詩には、あたりまえと思われていたことを鋭い視点で捉え直し、生きとし生けるものたちの命の輝きと尊さをうたい上げたものが多い。一方でみずぶは、「喜び」の影には「悲しみ」が、「目に見えるもの」の影には「目に見えぬもの」が、私たちの「生」の影には無数の「死」が存在することをうたっている。どちらかひとつだけが存在することはない。また、どちらが上位とか下位とかいうこともない。それぞれに存在意義があり、役目を果たしているのである。人間はそのことに深く思いをめぐらせ、内包して生きていかなければならない。——みずぶの詩に作曲することは、まさにみずぶとの旅であり、みずぶの示した光と影を抱きしめに行く旅であった。(中略)なお、曲順は自由に構成していただいかまわない。旅は一通りのものではない。演奏者皆さんそれぞれのお考えで(みずぶとの旅)に出かけていただけたら幸いである。

このように、「みんなちがって、みんないい」を強調しつつも、最終的には個々に解釈をゆだねているのだと考えられる。同様に新美

氏も、「金子さんの詩はとても素直で愛らしく、かつ私たちの心の奥深くに訴えるものがあります。(中略)派手さも奇をてらった新しさも何もありません。心の中にしみじみとしみじみしていく音楽さえあれば、それで良いと思いました。とはいうものの、随所にちよっと『おしやれな』和音がはさみこんであります。それは金子さんの詩を今という時代にはばたかせたいと願ったからです」と、自らの作曲意図と、みずぶの詩に対する印象を述べていながらも、それを演奏者には押しつけてはいない。

作曲者は、新しいハイブリッドな解釈を生み出しつつ、最終的には演奏者に解釈をゆだねているが、この傾向は三章でも述べたように、教科書掲載への変化にも見られる。合唱曲での流布や時代の流れにより、極めて強い「個性尊重」の解釈から解放され、解釈の自由が進んでいるといえるだろう。

おわりに

金子みずぶの詩は長く埋没していたが、矢崎節夫氏による全集化により、新たに注目されることになった。その一九八四年の再発見から、教科書への収録と合唱曲化という二つの形をとって社会に受容されていったといえる。これらは一九九五年以降の非常に新しい社会現象である。このうち教科書への収録という、教育現場を中心に受容されていたのが「個性重視」の解釈である。これに反対する形で、研究者は「自己肯定」の解釈を主張した。一方、合唱曲化されることよって、児童や研究者だけでなく、幅広い年齢層に受容されていった。ここでは作曲者の解釈は必ずしも演奏者側に押し

つけてはおらず、あくまでも個々に解釈をゆだねる形として流布されていった。この傾向は現在の教育現場でも見てとれ、教育現場では「個性尊重」の解釈から解放されつつあることが分かる。

以前は児童や女性たちなど、偏った層で受容されていたみすゞの詩は、今では様々な年代の人々からそれぞれの解釈で受け入れられている。そして今現在もなお、みすゞの詩は私達に受け継がれており、「みんなちがって、みんないい」の言葉は、読者を勇気づけているのである。

参考文献・資料一覧

- 金子みすゞ『新装版金子みすゞ全集』(JULIA 出版局、一九八四・八)
『金子みすゞー生誕一〇〇年記念(別冊太陽ー日本のこころ)』(平凡社、二〇〇三・三)
矢崎節夫『みんなを好きに 金子みすゞ物語』(JULIA 出版局、二〇〇九・四)
小島美子『日本童謡音楽史』(第一書房、二〇〇四・十)
矢崎節夫・萩原昌好編『日本語を味わう名詩入門 二 金子みすゞ』(あすなる書房、二〇一一・四)
矢崎節夫選『みすゞさんへの手紙』(JULIA 出版局、一九九八・七)
上田薫編『江古田文学 第三十九号』(星雲社、一九九九・三)
『ハーモニー 第一六八号』(全日本合唱連盟、二〇一四・四)
『国語三上わかば』(光村図書出版、二〇一一・二)
『みんなと学ぶ 小学校国語四年上』(学校図書、二〇一一・二)
『ひろがる言葉 小学国語五下』(教育出版、二〇一一・六)
石若雅弥『女声(同声)合唱とピアノのための『少女のまなざし』出版(マザーアース出版、二〇〇五・十二)
新実徳英『無伴奏混声合唱のための愛唱曲集』(金子みすゞの八つうた)』(音楽之友社、二〇〇九・六)
横山裕美子『二部合唱とピアノのための『みすゞとの旅』』(音楽之友社、二〇〇四・十一)
斎藤等『甦った『童謡詩人 金子みすゞ』の詩とのドラマチックな出会いー再発見当時の『金子みすゞ』に纏わる回想ー』(『山口芸術

- 短期大学研究紀要 第四十五巻』山口芸術短期大学、二〇一三)
川崎節子「教科書に入った金子みすゞの童謡詩」(『言語科学研究』)
神田外語大学大学院紀要 第八号』神田外語大学大学院、二〇〇二・三)
川田美里・奥忍「詩の朗読における音声表現ー行と行間、連間に焦点をあてた分析的研究ー」(『岡山大学教育実践総合センター紀要第七巻』岡山大学教育学部附属教育実践総合センター、二〇〇七・二)
矢崎節夫『みすゞコスモス 五二二編の星々の旅』(『歴史と旅 二一八(九)』秋田書店、二〇〇一・九)
小倉真理子『私と小鳥と鈴と』(詩と詩論研究会編『金子みすゞと海と空の詩』勉誠出版、二〇〇三・二)
パナムジカホームページ』(<http://www.panamusic.co.jp/ja/>)
カワイ出版ホームページ』(<http://editionkawai.jp/>)
音楽之友社ホームページ』(<http://www.ongakunotomo.co.jp/>)
楽譜ネットホームページ』(<http://www.gakufu.ne.jp/GakufuNet/index.phtml>)
神奈川県立総合教育センター 小学校国語教科書データベース』(<http://kyd.edu.chpref.kanagawa.jp/darai/>)
文部科学省ホームページ』(小学校学習指導要領)
(http://www.next.go.jp/a_menu/shotou/new_cs/youryou/syo/koku/001.htm)
光村図書出版ホームページ』(<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>)
教育出版ホームページ』(<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/index.rbz>)

学校図書出版ホームページ (<http://www.gakuto.co.jp/web/>)

日本文教出版ホームページ (<http://www.nichibun-g.co.jp/>)

asahi.com : 朝日新聞ビジネスニュース 二〇〇八年四月十日「大阪書籍が民事再生法申請 負債六十六億円」

(<http://web.archive.org/web/20080413214353/www.asahi.com/business/update/0410/OSK200804100051.html>)

いんぎょう人権 (<http://www.jinken.net.com/>)

全日本合唱連盟ホームページ (<http://www.jcanet.or.jp/>)

一 「童謡」は、江戸時代から明治時代にかけては、現在のわらべ歌の意味に使われていた。北原白秋は「明治の小学教育」がわらべ歌の伝統を無視していることに憤りを感じ、「童謡復興」の運動を展開し、新しい童謡をわらべ歌の伝統の上に発展させようとした。その過程で、新しい「童謡」がおとなの手による子どものための芸術的な歌という意味に変化していく。『赤い鳥』では新しい童謡を「創作童謡」と記したり、わらべ歌を「各地童謡」と記したりしており、童謡が創作童謡と伝承童謡の両方を含むこととはとして使われていたことが分かる。

二 小島美子『日本童謡音楽史』(第一書房、二〇〇四・七月)。

三 大正十一年(一九二二)六月から『金の星』と改題。

四 みすずは夫から詩作を禁じられたが、その際今まで書いてきた作品を三冊の手帳に清書し『美しい町』『空のかあさま』『さみしい王女』と名付けて、師である西條八十と、原本を弟正祐に残し、筆を絶った。

五 矢崎節夫、萩原昌好編『日本語を味わう名詩入門』(金子みすず『あすなる書房、二〇〇一・四)の中で、「みんなちがって、みんないい。』と

れほど多くの人が、このことばによって元気をもらい、はげまされたのでしよう。この誰もがいつかは、誰かがきたかったことばは、二十七年前に『金子みすず全集』(JULA出版局)が出版されて、初めて出合ったのです」と述べている。

六 川崎節子「教科書に入った金子みすずの童謡詩」(『言語科学研究』神田外

語大学大学院紀要 第八号) 神田外語大学大学院、二〇〇二・二)より。
七 神奈川県立総合教育センター 小学校国語教科書データベース (<http://kid.edu.ctr.pref.kanagawa.jp/gaiza/>)参照。昭和二十四年(一九四

九)平成十六年(二〇〇四)発行の小学校国語教科書に掲載された作品を、作品名、著作者等から検索することができ、
八 朝日新聞ビジネスニュース 二〇〇八年四月十日「大阪書籍が民事再生法申請 負債六十六億円」

(<http://web.archive.org/web/20080413214353/www.asahi.com/business/update/0410/OSK200804100051.html>)より。

九 日本文教出版ホームページ (<http://www.nichibun-g.co.jp/>)より。
一〇 大阪書籍から教科書の版權譲渡を受けた日本文教出版は、現在道徳の教科書を発行していない。注九に同じ。

二 矢崎節夫、萩原昌好編『日本語を味わう名詩入門』(金子みすず『あすなる書房、二〇〇一・四)より。
三 矢崎節夫『みんなを好きに 金子みすず物語』(JULA出版局、二〇〇九・四)より、以下引用。ああおとうとよ、君を泣く／君死にたもうてな

かれ／末に生まれし君なれば／親のなさはまざりしも／親は刃をにぎらせて／人を殺せとおしえしや、／人を殺して死ねよとて／二十四までをそだてしや…… 『恋衣』明治三十八年

三 注六に同じ。
四 光村図書出版ホームページ (<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>)より。

五 注六に同じ。
六 学校図書出版ホームページ (<http://www.gakuto.co.jp/web/>)より。

七 小倉真理子『私と小島と鈴と』(詩と詩論研究会編『金子みすずと空の詩』勉誠出版、二〇〇三・二) 花と海と空の詩』 勉誠出版、二〇〇三・二) 注六に同じ。

八 文部科学省ホームページ 小学校学習指導要領 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new/sy/youryou/syokaku/001.htm)より。

一〇 石若雅弥『女声(同声合唱とピアノのための『少女のまなざし』)出版(マザーアース出版、二〇〇五・十二)より。

- 二二 新実徳英『無伴奏混声合唱のための愛唱曲集『金子みすゞの八つのうた』
(音楽之友社、二〇〇九・六)より。
- 二三 横山裕美子『二部合唱とピアノのための『みすゞとの旅』(音楽之友社、
二〇〇四・十二)より。